

# 木村文助研究

通信 12号

2005年10月6日

## 教育関係者訪れる

八月二二日

隣町七飯町在住で北海道教育大学函館校講師浅利政俊氏が郷土資料室の平和展を参観した。先生は函館空襲など綿密な調査と平和運動をされている方だ。

続いて「赤い鳥・木村文助」コーナーへ足を運び、大野の綴り方や木村の功績について懇談した。先生からぶんぽけんの活動へ激励も受けた。

九月二一日

北海道教育大学岩見沢校の助教授新田和幸氏と学生さんが郷土資料室を訪れた。「赤い鳥・木村文助」コーナーで資料収集や綴り方を調べ卒業論文に生かしたいとのこと。

学生さんは、将来教員になったら大野の綴り方や木村先生の論文から学び、作文教育に役立てたい、と夢も語っていた。先生も長時間運転の疲れも見せず、調べやコピーに数時間を割いた。

以上郷土資料室職員と木下会長と杉目副会長が対応した。

最近、各地から小学校、大人の団体が郷土資料室を訪れた。参観者が多くなり、「赤い鳥・木村文助」コーナーは奥まった部屋なので資料室職員は誘導に気を配っている。

個人で訪れた小学生が赤い鳥の本を取り出し、熱心に読んでいる姿が時折見られる。



二〇〇五

四・七 木村文助研究通信11号発行

四・五〜六 「赤い鳥・木村文助」コーナー 模様替え

六・九 「赤い鳥・木村文助」コーナー活用について町内小学校を訪れる(大野小と市渡小、杉目、古俣役員)

六・二四 「赤い鳥・木村文助」コーナー活用について町内小学校を訪れる(島川小と萩野小、木下、高坂役員)

七・一 教育広報「おおの」No.112号発行

「赤い鳥に載った大野の作文」掲載

七・二二 木下会長が高齢者大学講師を務め、その中で木村文助の功績を語る

八・二二 教育大函館校浅利先生、コーナー訪れる

九・二七〜二〇 「赤い鳥・木村文助」コーナー整理(町民の協力あり)

九・二二 教育大岩見沢校より新田先生と学生、コーナー、訪れる

一〇・一 教育広報「おおの」No.113号発行

「赤い鳥に載った大野の作文」掲載



## 赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載しています。

## 酔っぱらい (推奨)

大野小高二 若松きよ

大きな男が二人で私を追って来たと思つて目がさめたら、酔っぱらいが家の前で「若松君、若松君」と、父を呼んでいた。黙つて聞いていると、向かいの兄さんと隣の山川のおじさんの声である。また「若松君、若松君」と呼んでも、家の者は一人も返事をする者がない。私は、やあ入ってきたらどうすべえ(どうしよう)と思つていると、父は「誰だべ、夜夜中、人の家さ、酒まぐらつて(酒飲んで)来る者ア」と一人で、ごもごもしながら「おい、夜夜中、人の家さ来て、少し小声でしゃべろ」と言いながら戸を開けた。

するとその人たちは「何、小声でしゃべるつて、誰が病人でもいるのなあ」と、入つて来た。「こら、高声すれば隣の病人にやがましして(うるさいから)」と父が言う、「うん、あのなり子(女の人の名)なあ」と舌をねばらかして、また大きな声で「大工さん、これ飲むべしよ(飲むよ)、何が食う物ねが(あ(ないか))と言いながら、酒瓶を置いた。父は「俺家にながら、何でもあるであ」と言いながら、台鍋で煮る仕度をしていた。二人は上がりかけに腰を掛けて、歌をうたうやら、芝居の真似をするやら、寝ていられないほど騒ぐので、寝ていた母は「だまして家さ連れて行つて、置いて来ればいんだもの」と言うか言わないうちに、向かいの兄さんは「お母さん、何しゃべっているんでえ。俺ア、こうして喜んでるのに、とがめるてなあ」とどなりつけた。母は「何して人の喜んでるの、とがめるわけねんだども、病人がやかましいして、少し声低くしゃべれと言つたんだあ」と言う、一人が「うん、俺に行けつてん

だ。このが(母)、これ行けつたら(行けというなら)行くど」とじなり(どなり)つけた。母は父に「だまして置いて来いば。いつまでもこうしていても、明日稼ぐに行くに倒れてしまつて(しまつから)」と言つと、父は「おい、おめだつ(おまえたち)。山川の家さ、行かねが」と言つた。山川のお父さんは「うん、行つてもいいども(いけれど)、おら家のばば、いねであ」と言つた。すると向かいの兄さんは「いねたていいど、こつたらところ(こんなところ)にいるより行くべし行くべし(行こう行こう)、爺」と言つて立つた。そして家のくぐり戸に頭ぶつたり、便所のさぐり板(羽目板の壁)によつ(寄り)かかたりして行く音がした。少したつて父が帰つて来た。「あの馬鹿どにかつて(馬鹿どものせいで)、ただ(かつて)寝でしまつて、これから寝だてなんぼも(いくらも)眠られねなあ」と時計を見上げていた。それから後、なに

も知らず、私は眠ってしまった。

(大正十三年十一月号)

## ■ことばの意味

【夜夜中】夜中を強めて言う言い方。夜ふけ。

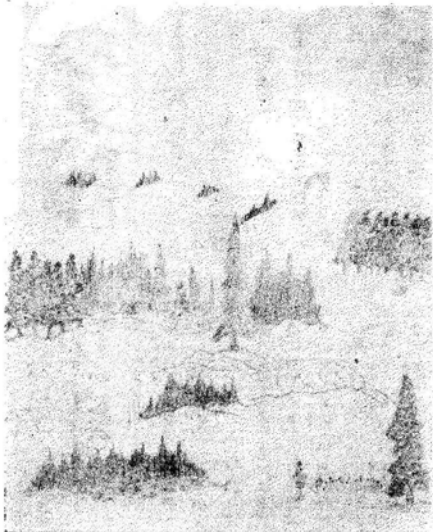
【台鍋】テーブルや食卓の上で、コンロや七輪で調理する鍋。

【上がりかけ】土間と段差のある居間のへり。

## 綴方選評

鈴木 三重吉

若松さんの「酔っぱらい」は、写実的にすぐれたものです。若松さんのお家は飲食店で、それを二人の酔っぱらいがどんどん叩きおこして、また飲みつづけようとしたのです。若松さんは何のたくみも用いずに、酔っぱ



観音山

(佳作)

大野小専五 伏見 馨

(大正十五年七月号)

らい二人は勿論、それをあしらわれるお父さんや、お母さんの言動、表情までをも、まさまさど劇的に写し動かしています。わからない方言は「酒まぐらつて」「なり子」(これは子供の名前か)、「こつたらところ」「さぐり板」など。それから「あの馬鹿どにかつてただ寝でしまつて」も、私たちにはさっぱり意味がわかりません。

【注】飲食店は、三重吉の勘違いで、大工さんです。この場合「でーく」と発音すると、より臨場感がまします。文面から、三人は平素からの飲み友達で、親密な付き合いがあったことがわかります。(町史編さん室)

## 自由画選評

山本 鼎

伏見馨君の「観音山」、この学校の、影日向をつけない、いわば日本画風の表現は悪くない。墨と毛筆を用いさして見てはどうだろう。つまり、水墨をもつてするデッサンをやらして見てはどうだろう。鉛筆のさきから出る線より、毛筆のさきから生まれる筆到の方が、ずっと味があるものだから。だが、寒中は、墨が凍るから、それが利かないかも知れない。

## 赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載しています。

## 母（推奨）

大野小高二 高田 むめ

私が一年生の頃、母は脚氣にかりました。買ひ葉ばかり飲んでいました。そのうち子供を産んでから、産脚氣になつて、段々歩けなくなつてしま

いました。乳も出なくなつたので、子供には毎日ミルクばかり飲ませたので、子供は段々と痩せてゆくばかりでした。瘦せた子供が泣くと、母はやつと枕元に手をついて、青く腫れた顔を上げて子供を黙って見ては、また顔を伏せるのでした。

そのうち七重（七飯町の旧七重村地区）の病院につれて行くことになりました。誰も看病に行く人がないので、姉をやることになった。姉はその時、たった尋常五年でしたが、学校を休んで行きました。何日か経つと、子供の舌などに沢山の疣が

出ました。その疣が真っ白になり、唇などが腫れてしまい、ミルクも飲めなくなりしました。父は、いろいろ心配して日毎に顔色が悪くなるばかりです。

母が病院に行つてから、何か月か経つた後、帰つて来ることになつたので、迎えに行くと、隣の所で行き会いました。母は戸板に乗せられ、顔に白い布を掛けていました。くまつた（入り乱れた）髪はどこどころ、むしつたようになって下がっているの、死んだようにも見えました。家の前まで来ると、戸板を下に降ろしました。近所の人達も沢山集まり、私たちも見ていました。それから母を家におぶつて来ました。

ところが、私が今まで癒つて来たのだとばかり思っていたら、悪くて医者から見放されたのだそうです。次の朝になつて、大騒ぎをしているので目がさめ、びっくりして跳ね起きました。

それから手早く帯を締め台所に来て見ると、姉が土間に立つて泣いていました。よそに働きに行つていた兄が、昼近くに来て、母に手をかけて泣きました。

次の日、母を洗つて樽に入れて、姉が仏壇の戸に顔を付けて泣くと、隣の婆さんが「泣くな泣くな、いくら泣いたって死んだものが生きては来ないから」と、涙をぼろぼろとこぼしました。父も目に涙を沢山ためて、今にも泣きそうな顔をしていました。私もそれを見て泣かないでいられません。しかし泣けば恥ずかしいと思つて、窓から顔を出して黙っていました。葬式の朝になると、ミルクも飲まれなくなつて痩せおとろえていた末の子供も死んで、もう箱に入れられていました。いま思い出しても、その時の悲しさは、どうしてもいいかわからないほどでした。

（大正十三年十二月号）

## ■ことばの意味

【脚氣】ビタミンB<sub>1</sub>の欠乏症。倦怠感・手足のしびれ・むくみなどから始まり、末梢神経の麻痺や心臓衰弱となる。かつて日本では国民病とされた。

【疣】皮膚の一部が円形に盛り上がった角質の小さな塊。

【戸板】雨戸の板。特に人や物をのせて運ぶ場合という。

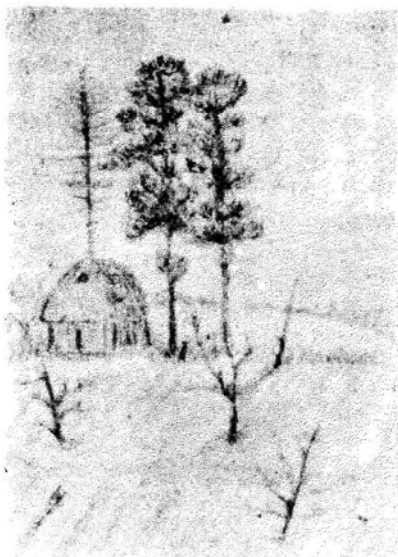
【土間】屋内で床板を張らず、地面のままにした所。

## 綴方選評

鈴木 三重吉

高一年の高田さんの「母」は、短い描写でもって、いちいちの事態を、ただれつくほど印象強く写しています。これは事実そのものが強烈であるからのみではなく、感銘の把握が深く鋭いからです。この二人の死の事実でも、だらだらした記述でかけば、やはり印象の稀薄なものになるわけです。「母」は以上の意味で、今度の推奨の中でも一番の傑作です。脚氣で病みおとろえておられるお母さんが、痩せ弱つた子供の泣く顔を見入つては、すぐにまたがくりと顔を伏せられるあたりの描出や、子供の舌に出来た疣がはれ上がつてミルクが飲めなくなつた様子や、お母さんが戸板に乗せら

## 風景（佳作）

大野小高二 立花 忠勝  
（大正十五年八月号）

## 自由画選評

山本 鼎

立花忠勝君の「風景」——いい鉛筆画だ。この学校のは総じて瘦せているのがいけないが、この立花君の絵は肉があり、ふつくりとしている。そして景のとらえどころも面白い。

# 資料閲覧（赤い鳥・木村文助コーナー）

## 「大野町郷土資料室」

町市街地に入り大野小学校の校門を入れて右側、木造の建物です。

〇四一一二〇一

北海道亀田郡大野町本町二〇〇

TEL (〇一三八) 七七・六六八一

開館：九・〇〇〇～一二・〇〇〇

一三・〇〇〇～一六・〇〇〇

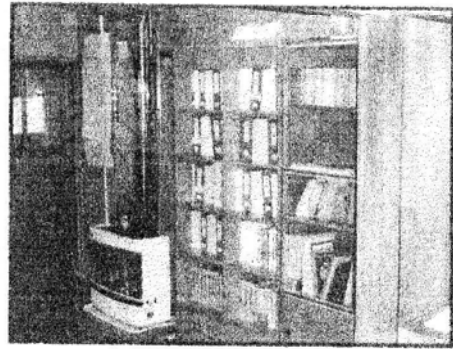
(町教委郷土資料室係が対応します)

・休館日もありますので遠方の方は事前に連絡ください

・函館方面↓車で、国道二二七号に入り大野町市街地まで、20～30分

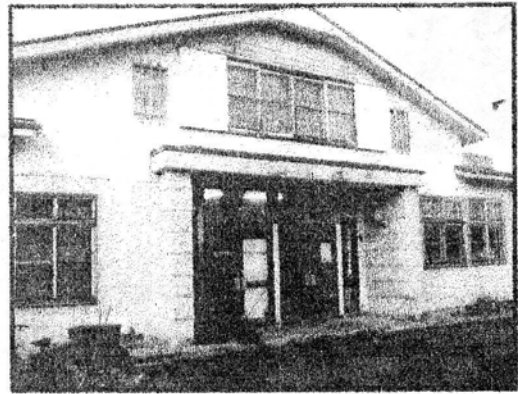
・道北方面↓車で、国道五号の大沼トンネルを抜け、五分ほどして

大野方向に右折し、更に五分で着きます。



展示室・赤い鳥復刻版

赤い鳥・木村文助コーナーのある  
大野町郷土資料室



編集・作成：会報委員会

木下寿実夫、小林亜輝夫、国塚妙子、古俣芳衛

発行：大野町文化財保護研究会

(略称文保研・ぶんぽけん)

〇四一一二〇一

北海道亀田郡大野町本町六八

会長 木下 寿実夫